ヴァチカン便り（50）

法王のイラク訪問

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

法王フランチェスコは、33回目となるイタリア国外への司牧の旅を行った。2019年11月の日本訪問についで、15カ月ぶりだ。昨年はパンデミックに突入して、予定されていたイタリア国外の司牧の旅は中止されたためである。また、パンデミックの恐ろしさ以外にも、イスラム過激派のテロ攻撃が心配されていた。とくにISIS（イスラム国）のテロ攻撃が心配された。

法王は3月5日にローマを出発し、イラクのバグダッドには同日夕刻に到着した。イラクのムスタファ・アルカディミ首相はじめ、カソリック神父、その他宗教者などによって出迎えられた。イラク訪問は、2代前の聖ヨハネ・パオロ2世法王の念願だった。またフランチェスコ自身も早いうちから、彼の地を訪問したいという望みを持っていた。それがやっと実現したのだ。

法王は以前からイラクの子供の難民を受け入れていた。その子供たちの世話取りを聖エジディオ共同体などに委託していた。ローマ法王のイラク訪問は、カソリック2000年の歴史の上で、現法王が初となった。フランチェスコは到着早々大統領官邸を訪問し、バルハム・サリー大統領に、訪問の目的などを話した。目的は「我々はすべてきょうだいであり、その実践を示す」ことだと述べた。そのあと、「救いの我らの母」大聖堂に移動し、司教、司祭、神父、その他宗教家とともにミサを捧げ、懇談を行った。

イラク3泊4日の滞在で、法王は現地6カ所の訪問、7回の講演、9回の飛行機移動、2回がイラク軍のヘリコプターを使っての移動と、多忙な行程になった。また、それ以外は防弾車を使って移動した。

到着翌日の3月6日は、南のナジャフに飛んだ。そこはイスラム・シーア派の中心地である。そこには、開祖マホメットの従弟であり、娘婿となったサイード・アリーの墓があり、そこに参拝した。また、シーア派のアヤトラであるアル-シスターニ師に面会。二人は親しく語り合った。結論は「きょうだい愛のないところには平和はない」ということだった。法王は全身白の衣装だったが、90歳のアル-シスターニ師は、全身黒の衣装で身を包んでいた。

法王は、ヴァチカンとして、アル-シスターニ師に感謝した。それは同師が、暴力に対して、また過去数年間の大困難に対して、シーク派の共同体とともに、声を大にして、弱者や被抑圧者を救うこと、人間生命の尊厳とイラク国民の統一の大切さを主張したからだ。さらに、アル-シスターニ師は、法王に対して、ISISの残忍な行為を枚挙した。ヴァチカンの報道官マッテオ・ブリーニによれば、法王フランチェスコは次のように語ったという。

> アル-シスターニ師は、宗教団体の中における協力と友好関係の大事さを強調されました。それは、相互理解を含め、対話を求めることです。そして、このことはイラクのために良いことであり、宗教界にあっても、当該の地域だけにとどまらず、広く人間世界全体に善となるでしょう。

法王フランチェスコは、ナジャフから少し離れたウルの平原を眺めた。アブラハムの地だ。この2000年以来、この地を初めて目にした法王である。法王はこの場所で、次のように述べている。

> ここは我々の父、アブラハムが暮らしていたところです。ここに来るのは我が家に帰ったようなものです。ここで彼は神の呼びかけを聞き、ここから旅に出たのです。それは歴史を変えた出来事でした。いまや、キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教は同じ兄弟姉妹です。アブラハムがしたように、我々もアブラハムを父として敬いましょう。空を見つめて、地をしっかりと歩んでいきましょう。……他の民族に手を差し伸べる民族でなければ、真の平和はありません。……他者を私たちの一人ではないと思うようでは真の平和はないのです。……一方が他方に対する敵対関係を持つことは、分断があるだけです。平和には勝者も敗者もない、兄弟姉妹があるのみです。……平和を求めるにはどこから始めるべきでしょうか？　それは敵としての感じを捨てることから始めるのです。星を見る勇気のある者を、また神を信ずる者を倒そうとする敵はいません。一つの心だけがあります。その心の扉を開き、対立する感情をなくすことです。

3月7日は訪問3日目。法王はヘリコプターでエルビルに飛び、そこから車でカラコシュ、モスルと回った。この地区はカソリックが非常に広まっていたところだ。それが、2014年から2017年にかけて、ISISによって徹底的に破壊された。とくに、カラコシュにあった大聖堂などは破壊された最たるものだ。当時は見る影もなかったが、2017年のISISの敗北以降、復旧作業も進んで、徐々に原状に戻りつつある。ISISの破壊工作が始まる前には、カソリック教徒はおよそ130万人を数えていたが、2017年、ISISの敗北の頃には約40万人に減ってしまった。カラコシ、モスルの多くの信者たちは国内のあちこちに逃れたり、隣国のシリアやイランに脱出したりした。なかには、レバノン、ヨルダンに逃れた人もいる。ISISとの戦いが終わった現在でも、多くの逃亡者は現地に戻っていない。まだ惨状の残っている地区を車で回った法王は、いかに感じたであろうか。

最後に、法王はモスルの競技場に1万人の人を集め、ミサを行った。パンデミックの時期でもあり、人と人との距離を確保しながらのミサであった。ミサの中で法王は、「今後も生活していくうちに、幾多の困難があるでしょうが、当地から逃げてはいけません。完全なる復興にはまだ時間がかかりますが、勇気を失わないようにお願いします」と述べた。

3月8日、法王はイラク訪問の旅を終えて、ローマへの帰国の途についた。帰りの飛行機の中で、恒例の記者団との質疑応答となった。その主要な点は次のようなものだった。

> 今回のイラクへの司牧の旅は長年の念願でしたが、これほど疲れたことはありませんでした。これは、84歳という年齢だけではなく、接触によってパンデミックを広げてはいけないと思っていたし、そのことを神に祈り続けていました。イスラムとの対話は実り多きものでした。アヤトラのアル-シスターニ師は立派な人で、神の子です。シーア派の尊厳を一身に集めていました。私は賢者に会わねばならないという義務感を持ちました。彼は光です。神は世界の所々に賢者を遣わしているようです。